

広島初！「アリと生きる植物展」の開催

堀川大輔・藤井智展・濱谷修一

はじめに

当園では毎年、子供たちの夏休み期間と重なる7月中旬～8月中旬に「世界の食虫植物展」を開催している。この度、「世界の食虫植物展」の前半2週間にあたる令和3年（2021年）7月17日（土）～8月1日（日）に「アリと生きる植物展」を同時開催した。アリ植物※に特化した展示は、これまで名古屋や大阪で開催されたことはあるが、広島では初めての開催であった。企画の経緯や展示の内容と関連イベントについて記す。（※アリ植物とは体内に空洞を作り、そこにアリを住まわせることで、アリと共生関係を築いている植物群のことをいう。）

テーマの選定について

本園では季節毎に様々な展示会を行っているが、展示内容のマンネリ化が問題となっている。マンネリ化を防ぐ方法として、展示物や解説の新規性、展示手法・場所の新規性などが考えられる。それらを踏まえた上で広報にも重点的に力を入れることにより、来園者増と来園者の満足度向上を目指していた。そういった中でどのような内容が良いか検討していたところ、2020年に京都府立植物園元園長の長澤淳一氏より「名古屋でアリ植物を生産・販売している伊藤さんという方が、各地の植物園と協力して展示をみたいと希望している」旨の話があった。ちょうどその頃、当園ではアリ植物のコレクション充実に取り組んでいたため、伊藤氏に展示協力を打診したところ、快諾をいただいた。当園では毎夏に「世界の食虫植物展」を開催しており、「虫と共生するアリ植物」と「虫を食べる食虫植物」を対比させれば非常に魅力的な展示になると考え、食虫植物展とのコラボの方向で準備を進めた。

展示の流れ

今回の展示は、展示植物の特性を生かし、展示効果を高めるため、過去の食虫植物展と比べて、会場レイアウトの面で以下の2点を工夫した。

1点目は、暑さを嫌う高地性のアリ植物の展示も行うため、冷房があるフクシア温室の西側一部も展示会場としたことである（写真1）。2点目は、スイレン温室常設の食虫植物コーナーを拡充しつつ、スイレン温室からフクシア温室に上がる道中にも食虫植物を展示したことである。新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う温室内の一方通行および上記2点を踏まえ、スイレン温室（食虫植物）～展示温室東側（食虫植物）～展示温室西側（低地性のアリ植物）～フクシア温室（高地性のアリ植物）という順路・展示となった（図1）。

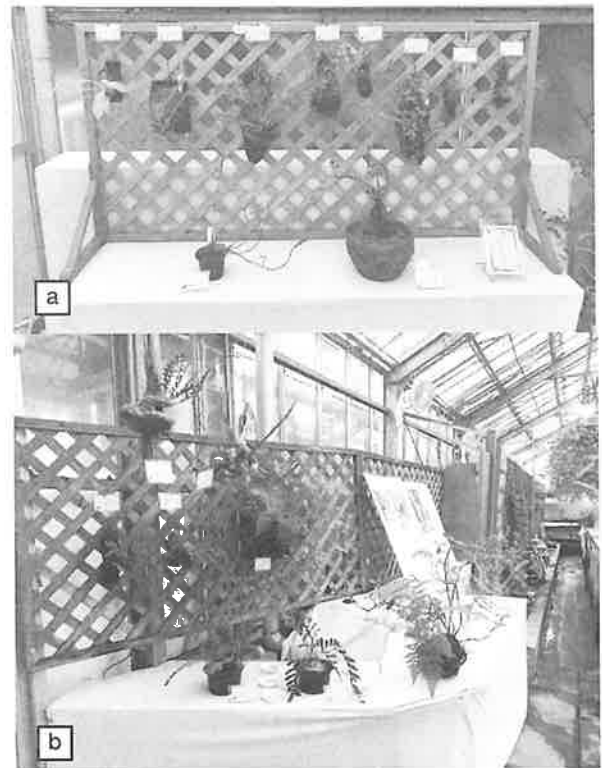


写真 1a、b フクシア温室に展示した高地性アリ植物

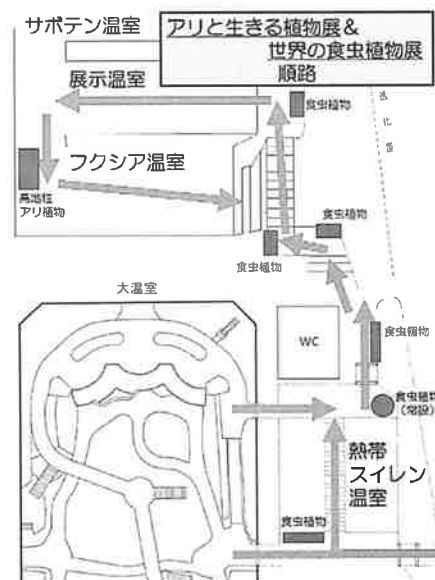


図1 観賞順路



図2 チラシ表面

チラシ・ポスターのデザイン・作成

前述の通り、広報にも特に注力すべく、「アリと生きる植物展」と「世界の食虫植物展」であわせてチラシ・ポスターを作成することになった(図2、3)。デザインは担当で考えた。

表面には、見たときのインパクトを考え、食虫植物やアリ植物を大きく、対になるように配置した。また、両者の共通項である「虫」についても触れるために、イラストのアリをそれぞれの場所に配置した。食虫植物では「食べられちゃうよ〜」「落ちちゃう〜」という吹き出しを付けて「食べられ」そうになっているところを表現した。一方、アリ植物では「こりゃいいね!」「住みやす〜い」などの吹き出しを付けて「共生している」ところを表現した。

裏面には、アリ植物と食虫植物の説明、講演会・実演会の告知、植物の販売の告知、開催期間中の他のイベントの告知を入れた。アリ植物はまだ認知度が低いため、より多くの人に興味・関心を持ってもらえるよう作成に努めた。



図3 チラシ裏面

展示の様子

前述の通り、展示温室西側およびフクシア温室西側一部には伊藤氏に出品協力いただいた90点近くのアリ植物と、大温室保有のアリ植物を数点展示した。展示温室南面には、伊藤氏が作成した、自身の紹介や、様々なアリ植物の紹介、分布・特徴などの解説パネルを9枚並べ(写真2)、その隣にディスクディア (*Dischidia*) やトコカ (*Tococa*) などのアリ植物を展示した(写真3)。ディスクディア(写真4a)は葉裏の空間にアリを住まわせ、そこで活動するアリの食べこぼし、や排泄物を吸収することで共生関係を築いている。トコカ(写真4b)は葉のつけ根にダニ室を思わせるような膨らんだ空間があり、そこにアリを住まわせている。トコカと共生関係を築いているアリは、周囲に生育する植物に蟻酸を注入することで枯死させる役割がある。アリにとっては住み家が拡充するメリットがある。そういったアリ植物を、後述するヒドノフィツムなどの比較的メジャーなアリ植物と区分けして展示した。



写真2 解説パネル

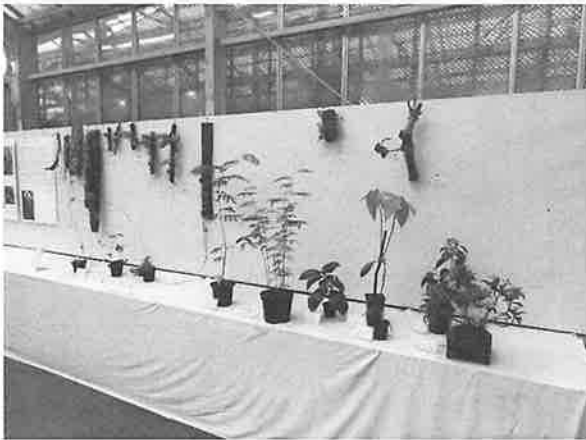


写真3 ディスキディア、トコカなどのアリ植物

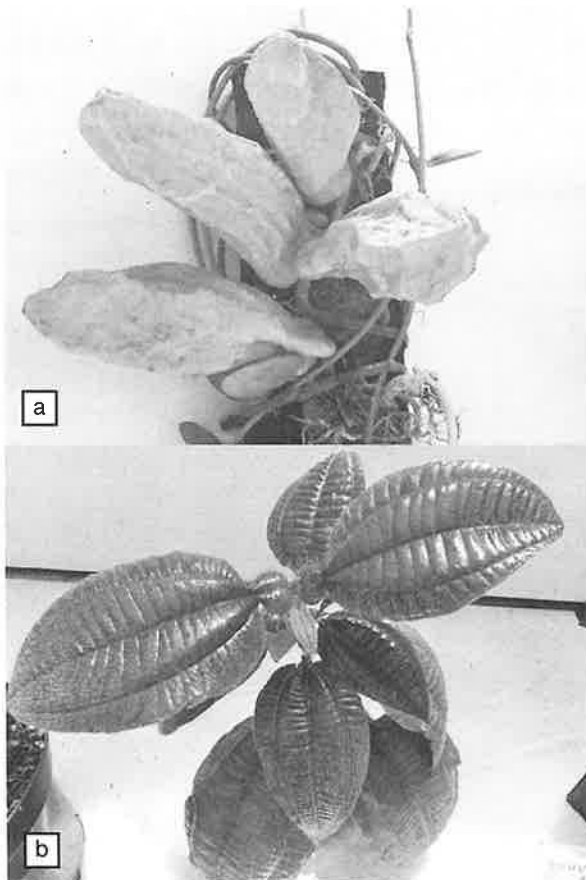


写真4 (a) ディスキディア、(b) トコカ

展示温室北面には、食虫植物とアリ植物の展示エリアの境に、両者の顔を併せ持つネペンテス・ビカルカラタ (*Nepenthes bicalcarata*) を展示した(写真5)。この種は「泳ぐアリ」と呼ばれるシュミッツイー (*Camponotus schmitzi*) というアリと共生関係を築いており、他のウツボカズラ同様、捕虫器に落ちた虫を消化・吸収するのだが、その一方でハエや蚊が捕虫器に卵を産みつけに来ることがある。その卵から産まれた幼虫は、他に落ちてきた虫を食べて成長し、やがてウツボカズラから飛び立っていく。シュミッツイーはそうなる前に幼虫を食べることで、排泄物として窒素源をウツボカズラに提供している。アリ側は捕虫器のフタの裏にある2本のキバのような突起の先端から出る蜜をもらったり、茎の中を住み家にしたたりしている。そのような変わった特徴を持つため、この場所で展示・解説した。



写真5 ネペンテス・ビカルカラタ

その隣には、アリ植物の自生地を模したジオラマ展示を制作した(写真6、7)。バージンコルクを柱状に組み立て、樹木に見立てた。そこに板付けされたアリ植物をビスで固定し、装飾用のアイスランドモスで目隠しして、樹木に様々なアリ植物が着生しているような雰囲気にしあげた。取り付けたアリ植物の種類によっては着生素材の水苔がほとんどないものもあり、非常にリアルなジオラマとなった。コルクの柱の足元はインテリアパークを敷き詰めた。



写真6 アリ植物のジオラマ展示



写真7 コルクの柱に付けられたアリ植物

ジオラマ展示の隣には、異なる採集地・形態のヒドノフィツム (*Hydnophytum*) やミルメコディア (*Myrmecodia*)、ミルメフィツム (*Myrmephytum*)、レカノプテリス (*Lecanopteris*) といった比較的メジャーな種類のアリ植物を展示した (写真8)。種類による形態の違いだけでなく、採集地 (自生環境) によっても形態に大きな違いが出るところを見せられるようにした。

アリ植物内に作られたアリの巣を見せるため、植物体を半分に切ったアリ植物も展示した (写真9)。このアリ植物は切ってから日数が経っているため、切り口が塞がりつつあった。



写真8 様々な種類・形態のヒドノフィツムなど

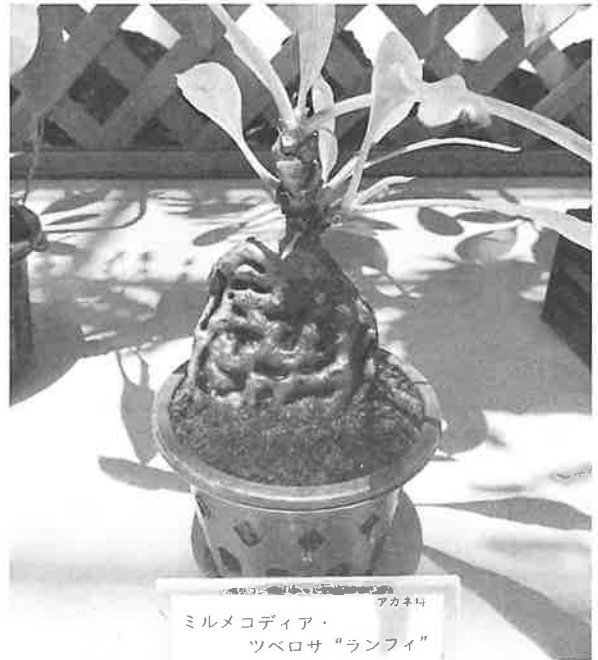


写真9 迷路のようになったアリの巣がわかる断面

展示植物の中には、花が咲いているものや実がついているものが数多くあり、入園者の方々に特に見てほしい珍しい種類やジオラマ展示については「イチ押し!!」の札を付けた (写真10、11)。ミルメフィツム・アルファキアヌムは、アリ植物を多数見てきた伊藤氏が最も美しいと言う種類で、会期中に花が見られることも珍しかった。ヒドノフィツム・カミニフェルムには塊茎上部に雨水を貯めるための穴が煙突のように開いており、アリではなくゴキブリが住んでいる。

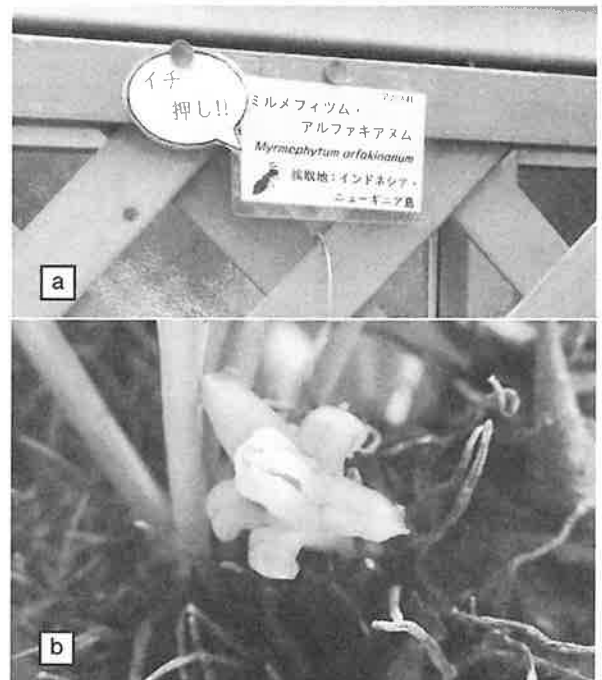


写真10a、b 美しい青い花を咲かせるミルメフィツム・アルファキアヌム (*Myrmephytum arfakianum*)

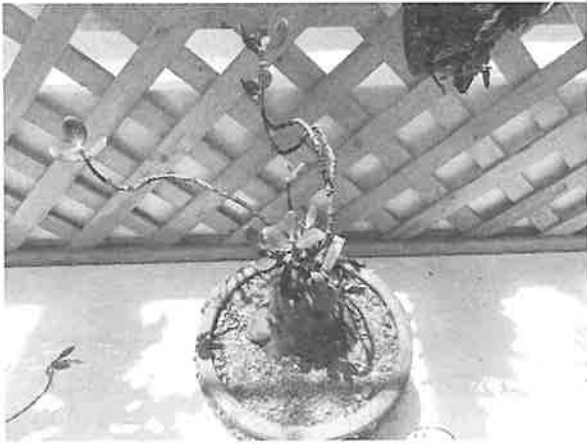


写真 11 煙突のような穴が開いているヒドノフィツム・カミニフェルム (*Hydonophytum caminiferum*)

廊下では、初心者向けで栽培が比較的容易なアリ植物をいくつか伊藤氏が販売した。

アリ植物講演会

7月24日(土)に「アリ植物講演会 その魅力と楽しみ方」という題目で講演会を行った。定員は100名で講堂にて行ったが、満員だった。前半では自生地の写真を見せながら、様々な種類・形態のアリ植物がどのようにアリと共生しながら生きているかを紹介した。後半ではアリ植物の栽培方法について紹介した(写真12)。夏休み期間中だったこともあり、親子連れの方が多く、子供たちが非常に興味を持って聞いていた。アリによる種子散布についてなど質疑応答も関連であった。講演会後のアリ植物販売会でも子供たちが前のめりになって育て方などを聞いていた(写真13)。

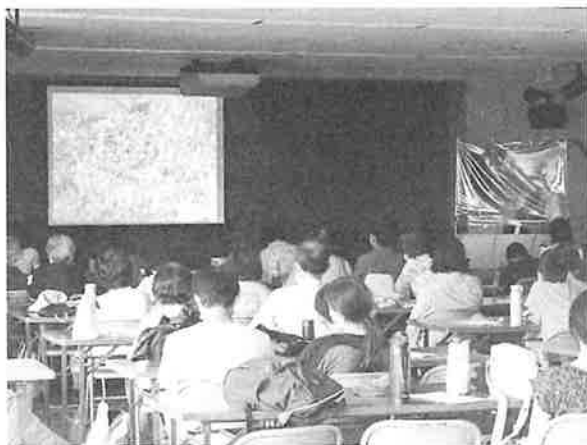


写真 12 アリ植物講演会の様子



写真 13 講演会後の販売会

所感

今回、まだまだ知名度の低いアリ植物の展示を企画し、入園者の方々にどのくらい興味を持って見ていただけるか不安であった。しかし、夏休み期間だったこともあり、多くの親子連れが展示されているアリ植物を見て、関心を示していたような印象を受けた。加えて、伊藤氏や職員等による植物の解説により、おもしろいと感じてもらえる入園者も数多く見られた。前述の通り、講演会では多くの子供たちが非常に興味を示していたので、展示担当者としても、伊藤氏としても非常に手ごたえのある展示だったと感じた。一方で展示・解説の面では、花や実の観察のさせ方や「ここに注目してほしい」といった点について、さらなる改善が必要だと感じた。また、「広島初」と謳ってチラシを作成したもののマスコミ取材は一切なかった。より多くの入園者に見てもらうために広報の部分でも改善の余地があると感じた。これらの改善点を踏まえて次回以降の展示会に活かしたいと思う。

最後に、展示協力していただいた伊藤蟻植物農園の伊藤彰洋氏に深く感謝申し上げます。